

声に出して読み、日本語の響きを楽しもう

東野炎立所見而反見為者月西渡

夫れ天地は万物の逆旅にして、光陰は百代の過客なり。
 夫天地者万物之逆旅、光陰者百代之過客。
 (李白「春夜桃李の園に宴」)

年年歳歳花相似あひたり 歳歳年年人同じからず
 年年歳歳花相似たう 歳歳年年人不ず同じ 同じ
 (劉廷芝「白頭

やまと歌は、人の心を種として、よろづの言の葉とぞなれりける。世の中にある人、事、業、わざ繁きものなれば、心に思ふことを、見るもの聞くものにつけて、言ひ出だせるなり。花に鳴く鶯、うぐひす水にすむ蛙の声を聞けば、かはづ生きとし生けるもの、いづれか歌を詠まざりける。

〔古今和歌集〕(仮名序)

いづれの御時おほんときにか、女御にようご、更衣かういあまた候きこひ給たまひける中に、いとやむごとなき際きはにはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり。

（紫式部『源氏物語』）

遊びをせんとや生まれけん
たはぶ
戯れせんとや生まれけん
遊ぶ子どもの声聞けば
わが身さへこそ揺るがるれ

（梁塵秘抄）
りやうちんひせう

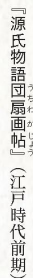
上代

奈良時代の人々は、中国の文字である漢字を使って、日本固有の言葉を書き記した。漢字の音を巧みに利用したこの用字法は『万葉集』に多様な用例が見られ、**万葉仮名**といわれる。

『文選』や『白氏文集』など、中国の詩文集は早くから日本に伝わり、奈良時代、平安時代の人々の教養の書となった。それ以降も日本語・日本文学に大きな影響を与えた。

漢字の草書体から日本固有の文字である平仮名が生み出された。これによつて、大和言葉を自在に書き表すことが可能になった。

『源氏物語』（室町時代後期の写本）
平仮名（変体仮名）中心で書かれている



二次元コードから、朗読音声にもアクセスできます。

3

物語

各教材で身につけたい言語能力を、**学習目標として明示**しました。その教材で「何を学ぶのか」を明確にして学習に取り組むことで、**確かな学力**へとつながります。

- 物語の歴史的・文化的背景について理解する
- 物語の内容を的確に捉え、登場人物の言動や心情を読み取る
- 古文を翻案した小説を読み、作品の解釈を深める

古典の読解力を高める定評のある教材を、豊富に掲載しています。

竹取物語

伊勢物語

言語文化の扉 平安時代の成人と結婚

学びを広げる

古典作品の翻案を読む

古文を読むために⑤ 助詞



二次元コードから、**作品解説**や**古典文法解説動画**、**補充教材**、「**知識・技能デジタルドリル**」などの学習コンテンツにアクセスできます。

内容理解のための「課題」と、語句や文法を身につけ語彙を豊かにする「文法と語彙」を設定。学習目標を達成するための手立てをわかりやすく示しています。

伊勢物語

あぐたは
芥川

昔、男ありけり。女のえ得まじかりけるを、年を経てよばひわたりけるを、からうじて盗み出でて、いと暗きに來けり。芥川といふ川を率て行きければ、草の上に置きたりける露を、「かれは何ぞ。」となむ男に問ひける。行く先多く、夜も更けにければ、鬼ある所とも知らで、神さへいといみじう鳴り、雨もいたう降りければ、あばらなる蔵に、女をば奥に押し入れて、男、弓・

胡籬を負ひて戸口にをり。はや夜も明けなむと思ひつゝるたりけるに、鬼はや一口に食ひてけり。「あなや。」と言ひけれど、神鳴る騒ぎにえ聞かざりけり。やうやう夜も明けゆくに、見れば率て來し女もなし。足ずりをして泣けどもかひなし。

白玉か何ぞと人の問ひし時
露と答へて消えなましものを

(第六段)



『伊勢物語絵巻』（鎌倉時代のものを江戸時代後期に模写）



1 よばひわたりけるを 求婚し続けたが。

2 芥川 所在不明。一説に現在の大阪府高槻市にある川。

問 ①「率て」とは、誰が誰を「率」たのか。

3 神 ここでは、雷のこと。

4 胡籬 矢を入れて背負う道具。



5 足ずりをして じだんだを踏んで。

6 白玉 真珠。

7 消えなましものを 消えてしまえばよかったのに。「消え」は「露」の縁語。

(↓ 85ページ)

* 語句
え：(打消) 率る いたし ゐる

課題

- 1 男の行動を順を追って整理しよう。
- 2 女はどのような人として描かれているか、またそれはどのような表現からわかるか、説明しよう。
- 3 「白玉か……」(55.8)の歌にこめられた男の心情を、「露」の語に注意して説明しよう。

文法と語彙

- 1 次の傍線部の助詞の意味・用法を調べよう。
 - ① 女のえ得まじかりけるを、(54.1)
 - ② 「かれは何ぞ。」となむ男に問ひける。(54.5)
 - ③ はや夜も明けなむと思ひつゝ (55.1)
 - ④ 人の問ひし時 (55.8)

3 物語

伊勢物語

言語文化の扉

平安時代の成人と結婚

扱われている題材や作品の背景など、教材への理解を深めるコラム「言語文化の扉」を随所に設けています。

現代では十八歳で成人となるが、平安時代は、男子は十一歳から十七歳頃に、女子は十二歳から十四歳頃に成人式を行った。

男子の成人式を元服といい、初めて大人の衣服を着、頭に冠をかぶった。なかには、あまりに美少年なので、もうしばらく少年の姿を見たいという周囲の要望から、元服を遅らせた人もいたようである。しかし、年齢的に成長しても元服をしていない（＝冠をかぶっていない）者は一人前とはみなされなかった。

女子の成人式は『竹取物語』「かぐや姫の生ひ立ち」（51ページ）にも描かれる髪上げと裳着である。男子と同様、初めて大人の衣服を身に着け、大人の髪型にした。眉毛を抜いて眉墨で眉を描き、お

齒黒をするという、現代とは異なる化粧もするようになる。

男子も女子も元服や裳着をして一人前になると、次は結婚である。平安時代は、一定の身分以上になると女は男の前に姿を現さない。男は適齢期の娘のうわさを聞いて、会ったこともない女に想像で恋をした。なかには、ひとめでも女の姿を見ようと垣間見をする男もいたが、現代のように直接会って話をするのではなく、和歌の贈答を通じて互いの気持ちを通わせ合った。男は三日続けて女のもとに通い、三日目の夜に祝いの「三日の餅」が供され、数日後に親類縁者を集めての「所顯し」によって二人の婚姻が披露されると、正式に結婚と認められた。女の家

に男が通うという形での結婚が一般的だった（通い婚）。

当時は、現代のような一夫一婦制ではない。『伊勢物語』「筒井筒」（60ページ）

の「男」が幼なじみの妻の他に「行き通ふ所」（60・14）を作ったように、複数の女性のもとに通うのも珍しいことではなかった。とはいえ、妻にしてみれば夫が自分以外の女性のもとに通うのはつらいものであろう。夫が他の女のもとに通い、自分のもとを訪れない嘆きは、和歌や物語などさまざまな文学作品に描かれた。『筒井筒』の「男」が幼なじみの妻の浮気を疑うのも、普通なら嫉妬するはずの妻が、不愉快だと思う様子もなく夫の外



垣間見の様子
（『源氏物語団扇画帖』江戸時代前期）

わかりやすい解説に図版を取り入れることで、言語文化に対する興味・関心を喚起します。

「学びを広げる」では、ここまでの教材で読み取ったことをふまえて取り組む**探究的な言語活動**を用意しています。

学びを広げる

古典作品の翻案を読む

次の文章は、『伊勢物語』を翻案した小説の一部である。

「それぞれが筒井筒の成り行きに、自らの意を申し立てます。」(65頁)とあるが、「業平」「覚行」「元親」それぞれの意見について、感じたことや考えたことをまとめ、発表しよう。

小説伊勢物語 業平

恋人を失って思い屈した果てに、東国への下向を決意した業平は、三河の国の郡司の館で、筒井の周りで遊ぶ童たちを目にする。筒井の記憶を呼び覚ました業平は「筒井は童の遊ぶところのみならず、恋の行くえにも関わる話が……。」と、旅のつれづれに語り始める。同行の供人「憲明」「元親」、僧「覚行」も杯を手を耳を傾ける。

話し終えて業平、呟くのでした。

「……いかに幼きころより良く知り、心通う仲であつても、男は他の女に懸想してしまうもの。それでも優れた心根の女の元へ、男はついに戻るもののようで。」

確かにそのようで、と頷きつつも覚行は、

「……その高安の女も哀れでございます。飯の手盛りはいかにも鄙の女、何が不都合にて

1 鄙 田舎。

男が離れたか、解らぬままでありましょう。」

元親は主人業平の意に添いつつも、

「この話、思いのほか深うございます。女の心は、執心が顕れぬ加減にて、心染むものとなりましょう。色も重ねれば黒く重とうなります。幼き頃より知りたる妻こそ、執心はあれどそれが顕れぬ程にて、思いやる歌にとどめましたのでは。もしや植え込みの陰にて、耳そばだてる夫のこと、気付いておりましたのでは。」

夜更けても尽きませぬ。それぞれが筒井筒の成り行きに、自らの意を申し立てます。

これらの声を呑み込むように、雨が降り出したのでございます。

憲明がふと口に当てた杯をそのままに、呟きました。

「……この話し、どこかで聞いたことがございますが、もしや業平殿ご自身の懺悔では……。」

業平、わずかに頬を緩めただけで、何も申しません。



高樹のぶ子 一九四六（昭和二一）年。小説家。山口県生まれ。現代における恋愛小説の新しい形を追求し続けている。作品に「光抱く友よ」「透光の樹」などがある。

■ 出典 『小説伊勢物語 業平』（二〇二〇年）

3 物語

学びを広げる 古典作品の翻案を読む

ジャンルや時代をまたいだ他作品との読み比べや調べ学習などを通じ、教材への理解をさらに深めるとともに、**自分の考えを表現する力**を育てます。

古典の作品を独自の世界観で再生させる試みは古くからある。物語としてだけでなく、ある時は芸能として、またある時はパロディとして、さまざまなジャンルにわたって数多くの作品が創作されている。



学習した文法がどのように作品の解釈につながっていくのかを解説した「文法から解釈へ」も設けており、**作品と行き来しながら文法を学ぶ**ことができます。

教材に即して文法事項をわかりやすくまとめた
「古文を読むために」を、各単元に配置しています。

助詞

古文を読むために 5

資料編 332 ページ

助詞とは、活用がない付属語で、種々の語に付いて他の語との関係を示したり、意味を添えたりするものであり、そのはたらきによって六種類に分類される。現代語に通ずる語、意味・用法も多い。

格助詞

体言または体言に準ずる語に付き、その語を受ける語との関係(格)を示す。

- 1 何ぞと人の問ひし時(55・8)……主格(が)
- 2 女のえ得まじかりけるを、(54・1)……同格(を)
- 3 見し人の松の千年に(114・1)……比喩(のように)

接続助詞

活用する語に付き、上の文節を下の文節に接続するはたらきをする。

- 1 竹を取りつつ、よろづのことに使ひけり。(50・1)
……反復(ては)
- 2 間かでないむありける。(60・3)……打消接続(ないで)
- ばの用法 ↓ 28・29 ページ

文法から解釈へ 6 助詞

何年にもわたって求婚し続けていた女をやつとのことで盗み出し、男は夜道を逃げていく。『伊勢物語』「芥川」(54 ページ)の一場面である。

A 神さへいといみじう鳴り、雨もいたう降りければ、

(54・8)

おそらくは追つ手もいることであろう。追いつかれて女を取り返されることがないよう、少しでも先を急ぎたいところではあるが、激しい雷雨のため、女を連れての逃避行は思うに任せない。「あばらなる蔵」(54・9)の奥に女を押し込んで、武器を持って戸口に居る男は、祈るような思いで一刻も早い夜明けを待っている。

A の記述には、副助詞が含まれている。助詞の一種である副助詞は、いろいろな語に付いてその語の意味を添え、後に続く用言を副詞のように修飾する役割を持つ。「神さへ」の「さへ」がそれで、(〜までも)という添加のはたらきをしている。試みに A からこの副助詞「さへ」を除いてみよう。

15

10

5

係助詞

いろいろな語に付き、疑問・反語・強意などの意味を添える。文末に一定の言い方を要求するものがある。

「係り結びの法則」↓ 28 ページ

◆ こそ 已然形、…… 逆接的用法(〜けれども)

1 初めこそ心にくくもつくりけれ、今はうちとけて、(61・6)
已然形

副助詞

いろいろな語に付き、副詞のように用言を修飾する。

1 神さへいといみじう鳴り、(54・8)……添加(〜までも)

終助詞

文末で、願望・詠嘆・禁止・念押しなどの意味を添える。

1 いかでこのかぐや姫を得てしがな、(52・6)

……願望(〜たいなあ)

間投助詞

いろいろな語に付き、語調を整えたり、詠嘆・呼びかけなどの意味を添えたりする。

1 玉の緒よ絶えなば絶えね(80・2)……呼びかけ(〜よ)

15

10

5

B 神いといみじう鳴り、雨もいたう降りければ、

A も B も、男の行く手を阻む雷雨の激しさに変わりはない。では、何が違ってくるのだろうか。

「さへ」が担っている添加とは、(今すでにそうであること)の上にさらに何かが付け加わるということを表している。A の雷雨は、女を連れて逃げる男にとって「行く先多く、夜も更けにけれ」(54・6)という現状の困難にさらに追い打ちをかけ、状況をますます悪化させるものとして描かれている。一方、B の雷雨は、ただ天候の変化を記述しただけのものである。A と B との表記上の差は、「さへ」という二文字の有無にすぎない。しかし、A では「さへ」という添加のはたらきゆえに、それだけでなく厳しい男の状況がより厳しいものになっていく様子が、実感を伴って描写されている。天候の変化は悪条件がさらに重なったことを意味していて、それゆえの男の焦燥感や緊迫感をより切実に読者に伝える効果を生むものとして、「さへ」は大切な役割を果たしている。

全体を支え、より豊かな世界を作り出しているのは、このような細かい部分であることが少なくない。自立語はもちろんだが、付属語もしっかり読み味わおう。

15

10

5

3

物語

古文を読むために 6 助詞

67

66

テーマや教材の内容に関連した「ブックガイド」を設けました。
教材の学習から、スムーズに読書へと広げることができます。



ブックガイド



平安時代の作品の名場面やエピソードを数多く取りあげ、当時の風俗や人々のものの見方、考え方などを親しみやすく解説する。



平安文学でわかる
恋の法則
高木和子

軽妙な筆致の現代語訳で、小説を読むような感覚で二作品を味わうことができる。和歌の現代語訳もわかりやすく、訳者注での解説も理解の一助となる。



現代語訳
竹取物語
伊勢物語
池田幸子

ストーリーはほぼそのままに、現代的な視点や独自の解釈を交えて漫画化した新しい『竹取物語』。和歌のやりとりで気持ちを伝える場面もわかりやすい。



竹取物語
池田幸子

各巻の話の内容が、その文化的社会的背景に基づく解説・解釈とともにまとめられている。いわゆる古典常識についての参考図書としてもよい。



平安人の心で
「源氏物語」を読む
山本淳子

全百二十五段の新訳。登場人物の心情は、「和歌」で「あからさまに遠慮なく素直に」表現されている。和歌の訳に着目しながら読み味わいたい一冊。



伊勢物語
川上弘美訳

筆者が『伊勢物語』を現代語訳しながら考えた「余計なこと」や「男」へのひと言」などを織り交ぜながら、その魅力を伝えるユーモラスなエッセイ。



恋する伊勢物語
徳万智

自分の学習を振り返ってこれからの学習へと生かす
「単元の振り返り」を設定しました。各項目は、単元扉
に示した学習目標と対応しており、「観点別評価」にも
つなげられます。



単元の振り返り

- 物語の歴史的・文化的背景について理解することができたか
- 物語の内容を的確に捉え、登場人物の言動や心情を読み取ることができたか
- 古文を翻案した小説を読み、作品の解釈を深めることができたか

漢文編では第1単元に「漢文入門」を置き、**漢文とは何かを知る**ところから学習へ入っていきます。

漢文の世界へ

漢文とは、漢字で書かれた中国古来の文章のことで、それに倣って日本で書かれた日本漢文も含むものである。

日本人は、漢文で記された中国の書物を読むことを通じて、大陸の豊かな文化を吸収・消化し、日本の文化を大いに発展させてきた。例えば、日本固有の文字である平仮名・片仮名さえもが漢字を用いて作られたものであるという事実には思い至ったとき、我々は改めて漢文の影響の大きさに気づくであろう。漢文は、日本人にとっての知恵の宝庫として、日本の古典の血肉ともなったのである。

漢文で書かれた中国の書籍を、日本では原文にそって厳密に読みこなそうとした。その工夫を知るために、次の文を見ることが始めよう。

春眠 不 覚 曉

このように漢字だけで書かれた原文を**白文**という。この原文（白文）の意味を読み取って、

白文に符号や送り仮名などを付して日本語訳（和訳）する方法、これを**訓読**という。この訓読によって、右の白文は次のようになる。

春 眠 不^ズ 覚^ユ 曉^ヲ

送り仮名を漢字の右下に付し、**返り点**という符号を漢字の左下に付することで、原文の意を日本語訳したことになる。この訓読に必要な送り仮名、返り点や句読点を総称して、**訓点**という。そして、訓点に従って次のように漢字仮名交じりの文章としたものを**書き下し文**という。

春眠 曉を覚えず

日本人は、原文を訓読する方法を編み出したことで、外国の文章である漢文をまるで日本語の文章であるかのように読むことができるようになった。訓読された文章は日本の言語文化に強い影響を与え、後には漢文訓読体の文章が誕生することにもなった。

このように先人が工夫し、発展させてきた「訓読」法。その基本を学習し、私たちに与えてかけがえない古典ともいえる漢文の扉を自分の力で開けていくことは、さまざまな発見や感動に確実につながっていくだろう。



馴染みのある漢詩の一節から、**訓読**、**訓点**および**書き下し文**について学びます。

文法事項をわかりやすくまとめた「漢文を読むために」とあわせ、**漢文読解を支える基本的な知識を着実に習得**できます。

第1単元では、成句・格言をもとに、**漢文の基本構造、置き字、再読文字**について学びます。

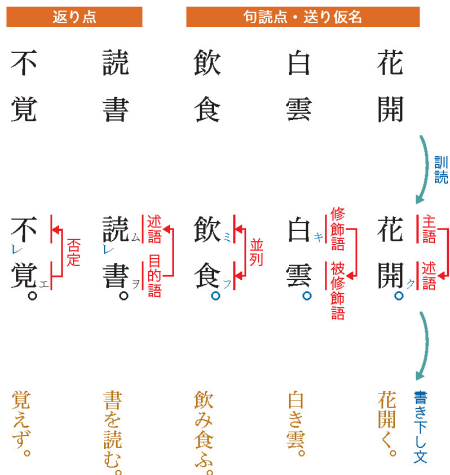
成句・格言を読む(1) 漢文の基本構造

- 1 少年易老、学難成。
若者はすぐに年をとり、学問はなかなか成就しない。
- 2 不入虎穴、不得虎子。
虎のすむ穴に入らなければ、虎の子を捕まえることはできない。
- 3 他山之石、可以攻玉。
よその山の石ころでも、それを用いて宝玉を磨くことができる。
- 4 不為児孫買美田。
子孫のために財産を残すことはしない。
- 5 勿以恶小而为之。
悪いことは、ささいなことだからといって、してはいけない。
- 6 吾日三省吾身。
私は日々何度もわが身を振り返る。

漢文を読むために①

漢文の基本構造と訓読

漢文は、漢語の語順により文意が決定され、述語の後に目的語や補語がくるなど、日本語と異なる文法構造をもつ。そのためこれを日本語として読む工夫として、**訓点(句読点・送り仮名・返り点)**を施すことが行われた。これを**訓読**といい、**訓読**に従って漢字仮名交じりの文に改めたものを**書き下し文**という。



訓点

句読点	句点(。)と読点(、)。文の区切りを示す。
送り仮名	日本語の助詞や助動詞、用言の活用語尾にあたる。古典文法に従い、歴史的仮名遣いを用いる。漢字の右下に片仮名で付す。
返り点	日本語の語順と同じように読んでいくための記号。漢字の左下に付す。

返り点の種類と使い方

レ点	すぐ下の一字からすぐ上の一字に返って読む。
一・二点	一点を付した字から、二字以上を隔てて、上の字に返って読む。必要に応じて「一・二・三……」となる場合がある。
上・下点	上点を付した字から、一・二点を付した句を間に挟んで、さらに上の字に返って読む。必要に応じて「上・中・下」となる場合がある。
ㄱ・ㄴ点	まずはレ点、次に一・二点、または上・下点に従って読む。
(合符) ㄷ・ㄹ点	返って読む字が熟語のときは、その熟語の中間に合符(合符)。今日ではハイフンの印()を引き、その中間に返り点を付す。

1 目的語 動作の目的(対象)となる語。「ヲ」と送り仮名を付すことが多い。

2 補語 述語を補足する語。「ニ・ト・ヨリ」と送り仮名を付すことが多い。



漢文編の第2単元以降は、故事成語、史話、漢詩などジャンルごとに作品を学んでいきます。

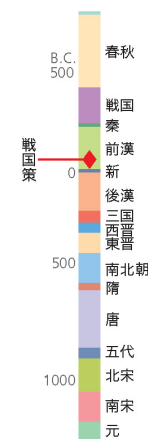
借虎威

虎求^{メテ}百獸^ヲ而^{ラフ}食^ス之^ヲ。得^{タリ}狐^ヲ。狐曰^{ハク}、「子^シ無^ク敢^{ヘテ}食^ス我^ヲ也^ヲ。」天^{テン}帝^{テイ}使^{シム}我^ガ長^{チヤウ}百獸^ヲ。今^{イマ}子^シ食^ス我^ヲ、是^{コレ}逆^{ギャク}天^{テン}帝^{テイ}命^{メイ}也^ヲ。子^シ以^{モッテ}我^ヲ為^ス不^フ信^{シン}。吾^{ワレ}為^ス子^シ先^{マデ}行^ク。子^シ隨^{シテ}我^ガ後^{ノチ}。觀^{ミヨ}百獸^ヲ之^ノ見^ミ我^ヲ、而^ニ敢^{ヘテ}不^レ走^ラ乎^ヤ。」

虎^コ以^チ為^ス然^ニ。故^ユ遂^{ツヒニ}与^ニ之^ノ行^ク。獸^{シユ}見^ミ之^ヲ皆^ハ走^ル。

虎^コ不^レ知^ラ獸^{シユ}畏^{オソレテ}己^ヲ而^ニ走^ル也^ヲ。以^チ為^ス畏^{ルト}狐^ヲ也^ヲ。

(戦国策)



1 子 あなた。
2 天帝 万物をつかさどる天の神。

3 走 逃げる。

問① 「之」は何を指すか。

作品への理解を深める効果的な絵図・写真を随所に配置しています。



『成語故事』

句法

無^ク敢^{ヘテ} (無理にすること。)

使^ム [A] [B] (AにBさせる。)

今^{イマ} (もしくならば。)

敢^{ヘテ}不^レ乎^ヤ (どうして(し)ないでいようか、いや きっとする。)

*訓読で注意する語

也 以^チ [A] 為^ス [B] 為^ス 之 然 故 遂 与

課題

1 「然」(140.6)の内容を具体的に説明しよう。

2 「虎の威を借る」は、現在どのような意味で使われているか、調べよう。

文法と語彙

1 「観」(140.4)と「見」(140.4)の意味の違いを調べ、その違いがわかりやすい熟語をそれぞれあげよう。

2 故事成語

借虎威

戦国策
劉向
↓139ページ

漢文では、中国の年代による「成立年代バー」を付しています。

言語文化の流れやつながりについて理解を深められる、**ビジュアルな解説ページ**を設けています。

漢詩の世界へ



白居易の詩文集。白居易の生存中に数次にわたり編集された。作者の存命中に日本に伝わり、平安時代の人々の広い支持を受け、共通の教養として親しまれた。明治以降、「はくしもんじゅう」とも称された。



■ 三體詩

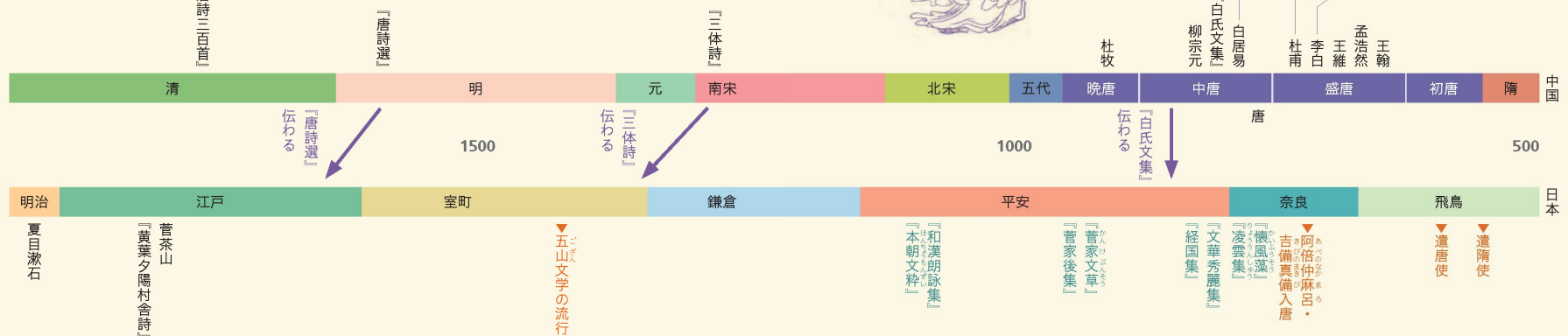
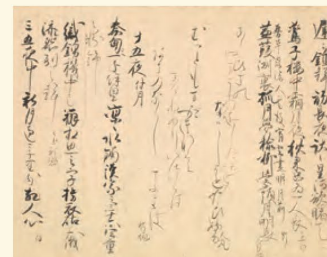
唐詩の選集。六卷。南宋の周弼(？～一二五〇)の編。七言絶句・七言律詩・五言律詩の三つの詩体、四百九十四首を選び、構成及び表現法によって分類し、作詩法の基準を示した。日本では、室町時代以降、広く読まれてきた。中唐以降の詩人の作品を多く載せているため、盛唐を代表する詩人である李白・杜甫の詩は収録していない。

■ 唐詩選

唐詩の選集。七卷。明の李攀龍(一五一四～一五七〇)の編と伝えられる。王維・李白・杜甫ら盛唐詩人の作品を中心に四百六十五首を収める。日本では、江戸時代に大いに流行し、唐詩を学ぶための代表的な選集となった。盛唐までの詩人が中心となっているため、中唐の白居易や晩唐の杜牧の詩を収めていない。

■ 唐詩三百首

唐詩の選集。六卷。清の孫洙(一七一〇～一七八)の編。五言古詩・七言古詩・五言律詩・七言律詩・五言絶句・七言絶句の詩体別に約三百首を収める。初学者用に編集された。

『唐詩選画本』
(橘石峰筆 江戸時代後期)五山版『杜工部集』
(室町時代前期)『和漢朗詠集』
(鎌倉時代の写本)遣唐使船の様子
(『鑑真和尚上東征絵伝』 鎌倉時代後期)

教科書で扱った作品や作者の系譜が一覧できます。

近代以降の 文章編

1 小説1

近代以降の文章編では、**小説を「読む」ことに集中できる**、定評のある教材を掲載しています。
小説の読解力を、確実に高めることができます。

羅生門

参考 羅城門登上層見死人盗人語第十八

レッスン

文学を読むために①語り手

学びを広げる

小説の書き換え

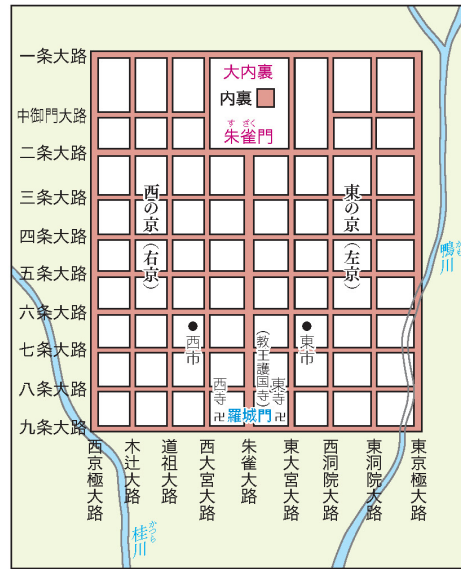
- 作品の構成、場面や状況における登場人物の心情を適切に読み取る
- 語りの仕組みを理解し、視点を変えて物語を書き換える

二次元コードから、**作品関連動画・講義動画や補充教材、「知識・技能デジタルドリル」**などの学習コンテンツにアクセスできます。



芥川龍之介
（『昔物語集』）
角田光代

地図や語句の説明図版などを適宜配置。文章の理解を助けるとともに、**より豊かなイメージをもつ**ことで、主体的に読解に取り組むことができます。



平安京略図

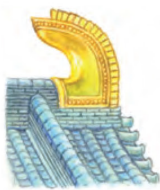
小説 1

羅生門

も気味を悪がって、この門の近所へは足踏みをしないう事になってしまったのである。
 そのかわりまたからすがどこからか、たくさん集まってきた。昼間見ると、そのからすが、何羽となく輪を描いて、高い鷗尾の周りを鳴きながら、飛び回っている。ことに門の上の空が、夕焼けで赤くなる時には、それがごまをまいたように、はつきり見えた。からすは、もちろん、門の上にある死人の肉を、ついばみに来るのである。——もつとも今日は、刻限が遅いせいにか、一羽も見えない。ただ、ところどころ、崩れかかった、そうして

その崩れ目に長い草の生えた石段の上に、からすのくそが、点々と白くこびりついているのが見える。下人は七段ある石段のいちばん上の段に、洗いざらした紺の襦の尻を据えて、右の頬にできた、大きなきびを気にしながら、ぼんやり、雨の降るのを眺めていた。

9 襦 衾の衣。庶民がふだん着として用いた。



8 鷗尾 宮殿・仏殿などの棟の両端に取り付けた飾り。

7 旧記 古い記録。『方丈記』（鎌倉時代前期）に類似の記事がある。

6 辻風 つむじ風。旋風。

5 揉鳥帽子 男性が平常服の際に用いたかぶり物。ここでは、それをかぶった男のこと。



ある日の暮れ方のことである。一人の下人が、羅生門の下で雨やみを待っていた。
 広い門の下には、この男のほかに誰もいない。ただ、ところどころ丹塗りの剥けた、大きな円柱に、きりぎりすが一匹止まっている。羅生門が、朱雀大路にある以上は、この男の外にも、雨やみをする市女笠や揉鳥帽子が、もう二、三人はありそうなものである。それが、この男のほかに誰もいない。
 なぜかという、この二、三年、京都には、地震とか辻風とか火事とか飢饉とかいう災いが続いて起こった。そこで洛中のさびれ方はひととおりではない。旧記によると、仏像や仏具を打ち砕いて、その丹がいたり、金銀の箔がついたりした木を、道端に積み重ねて、薪の料に売っていたということである。洛中がその始末であるから、羅生門の修理などは、もとより誰も捨てて顧みる者がなかった。するとその荒れ果てたのをよいことにして、狐狸が棲む。盗人が棲む。とうとうしまいに、引き取り手のない死人を、この門へ持ってきて、捨てていくという習慣さえできた。そこで、日の目が見えなくなると、誰でも

1 羅生門 平安京の正門。朱雀大路の南端にあった二階造りの大きな門。本来は「羅城門」と表記。
 2 丹塗り 赤色の顔料である丹または朱で塗っていること。
 3 朱雀大路 平安京の中央を南北に走る大通り。
 4 市女笠 菅や竹で編んだ笠。もとは市女（市場で物を売る女性）が用い、のちに、女性の外出の際に多く着用された。ここでは、それをかぶった女のこと。



羅生門

芥川龍之介



明治 大正 昭和 平成 令和
 1868 2000
 羅生門

必要十分な脚注・挿絵が、**確実な小説の読解**を支えます。

内容理解のための「課題」を、複数段階にわけて設定。**単元の学習目標を達成するための手立て**を、わかりやすく示しています。

課題

- 1 この作品の背景となっている京都の町や羅生門の描写に注目し、そこに描かれている当時の社会状況についてまとめよう。
- 2 下人が羅生門の下に至るまでの経緯をふまえ、門の下での下人の心情についてまとめよう。
- 3 楼上上って以降の下人の心理の推移を、箇条書きにして整理しよう。
- 4 老婆は自分の行いについてどのように語っているか、また、下人はそれをどのように受け止めているか、整理しよう。
- 5 「下人と老婆」のその後の物語は、どのようなものになると思うか、話し合おう。

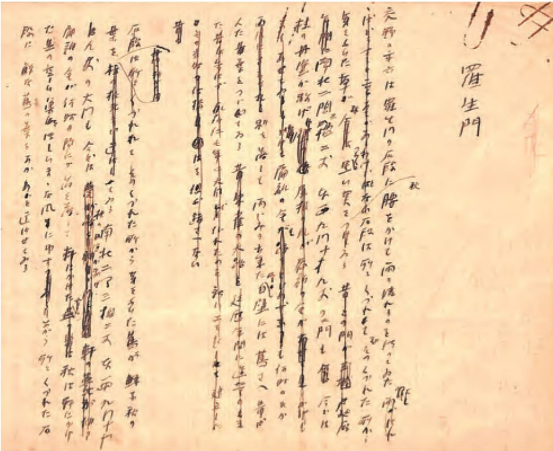
語彙と漢字

- 1 本文中から動物を使った比喩を抜き出し、どのような効果があるか、考えよう。
- 2 次の傍線部の読みを書こう。
①嗅覚 ②暫時 ③憎悪 ④成就 ⑤侮蔑
- 3 次の傍線部を、送り仮名も含めて漢字で書こう。
①手足をのばす
②犯人をとらえる
③文章の要点をとらえる
- 4 次の傍線部の片仮名を漢字で書こう。
①先輩にエンリヨする
②彼らはホリヨになった
③コウキ心強い
④キシユク舎で生活する
⑤キバ戦に参加する
⑥ゴヘイがある
⑦シヘイが発行される

語彙を豊かにするため、読み書きだけでなく、形が似ている漢字や同音異義語なども交えた問題を提示しています。



芥川龍之介 一八九二（明治二五）年～一九二七（昭和二）年。小説家。東京都の生まれ。緊密な文体、知的な構成による作風で知られ、近代日本を代表する作家の一人である。作品に「地獄変」「河童」「歯車」などがある。
■出典 『芥川龍之介全集 第一巻』（一九七七年）



「羅生門」草稿



『羅生門』初版本表紙（1917〈大正6〉年）

写真・図版も交えて作品の時代背景や作者への理解を深め、言語文化の学びをさらに広げていきます。

「羅生門」の素材となった「今昔物語集」と読み比べ、古典と近代以降の文章とのつながりを考えたり比較したりすることで、日本の言語文化への理解を深めます。

参考

「羅生門」という作品は、次の『今昔物語集』の「羅城門登上層見死人盗人語第十八」という説話を主な素材としている。「羅生門」と説話とを読み比べ、書きぶりや展開などについて、共通点や相違点を発表し、話し合おう。

羅城門登上層見死人盗人語第十八



今は昔、摂津の国のほとりより盗みせむがために京に上りける男の、日の未だ明かりければ、羅城門の下に立ち隠れて立てりけるに、朱雀の方に人しげく歩きければ、人の静まるまでと思ひて、門の下に待ち立てりけるに、山城の方より人どものあまた来たる音のしければ、それに見えじと思ひて、門の上層にやはらかかつり登りたりけるに、見れば、火ほのかにともしたり。

盗人、怪しと思ひて、連子よりのぞきければ、若き女の死にて伏したるあり。その枕上に火をともして、年いみじく老いたる軀の白髪白きが、そ

の死人の枕上に居て、死人の髪をかなぐり抜き取るなりけり。

盗人これを見るに、心も得ねば、これはもし鬼にやあらむと思ひて恐ろしけれども、もし死人にてもぞある。脅して試みむと思ひて、やはら戸を開けて、刀を抜きて、「己は、己は。」と言ひて走り寄りければ、軀手まどひをして、手を摺りてまどへば、盗人、「こは何ぞの軀のかくはし居たるぞ。」と問ひければ、軀、「己が主にておはしましたる人の失せ給へるを、あつかふ人の無ければ、かくて置き奉りたるなり。その御髪の丈に余りて長ければ、それを抜き取りて髪にせむとて抜くなり。助け給へ。」と言ひければ、盗人、死人の着たる衣と軀の着たる衣と抜き取りてある髪とを奪ひ取りて、下り走りて逃げて去りにけり。

さて、その上の層には死人の骸骨ぞ多かりける。死にたる人の葬りなどえせぬをば、この門の上にぞ置きける。

このことはその盗人の人に語りけるを聞き継ぎてかく語り伝へたとや。

（今昔物語集）

【口語訳】

今は昔、摂津の国の辺りから盗みをしたように京に上ってきた男が、まだ日が暮れず明るかったので、羅城門の下に立ち隠れて立っていたが、朱雀大路の方はまだ人の行き来が激しく、人通りが静まるまでと思つて、門の下に立っていたときに、山城の方から大勢の人がやってきた音がしたので、それに見られまいと思つて、門の二階にそつとよじ登つたときに、見ると、ぼんやりと火をともしている。盗人は、おかしいことだと思つて、連子窓からのぞいてみたところ、若い女が死んで横たわっている。その枕元に火をともして、ひどく年老いた白髪の老婆が、その死人の枕元に座つて、死人の髪を手荒く抜き取っているのだつた。

盗人はこの様子を見て、どうにも合点がいかず、もしやこれは鬼ではなからうかと思つて、ぞつとしたが、あるいはすでに死んだ者の霊かもしれない。ひとつ脅して試してみようと思つて、そつと戸を開け刀を抜いて、「こいつめ、こいつめ。」と叫んで走りかかると、老婆は慌てふためき、手をすり合せて狼狽するところ、

盗人が、「おまえはいったい何者だ。何をしているのだ。」と問うたところ、老婆は、「実はこの方は私の主人でいらつしやうた人だが、お亡くなりになったのに、甲いをしてくれる人がいませんで、こうしてここにお置きしているのです。そのおぐしが背丈に余るほど長いので、それを抜き取り髪にしようと思つて抜いているのです。どうぞ、お助けください。」と言つたところ、それを聞いた盗人は、死人の着ていた着物と老婆の着衣、それに抜き取つてある髪の毛とを奪い取つて、二階から駆け降りて、逃げ去つた。

ところで、この羅城門の二階には死人の骸骨がたくさんあった。葬式などできない死人を、この門の上に置いたのである。

このことはその盗人が人に語つたのを聞き継いで、こう語り伝えていくことだ。

■今昔物語集 説話集。編者未詳。平安時代後期の成立。本文は『新編日本古典文学全集』によつた。

作品理解のため、現代語訳を併記しています。

各教材で身につけた言語能力や読み取った内容を活用できる**探究的な言語活動「学びを広げる」**を、各単元に用意しています。

単元の教材に即して、文学の読解のための方略を解説した「文学を読むために」を設定しました。汎用性のある知識・技能を習得し、**小説の読解力**を高めます。

語り手

文学を読むために ①



物語や小説は、「語り手」によって語られる。語り手には、一人称の語り手(話の中の登場人物の一人)と、三人称を使つて語る語り手(話の外側にいる第三者)とがある。

『羅生門』の「作者はさつき、下人が雨やみを待っていた。」と書いた。(200頁)の「作者」は、語り手が「作者」と称して話の中に登場したものである。

一方、「レッスン」の語り手は「小学校に上がったときからはじめてというのに、五年生になつてもあたしは右手と左手をべつべつに動かすことができず、それから、ピアノの先生になじめなかった。」(214頁)と一人称「あたし」で語っている。この小説の語り手では、「あたし」の内面をたどることはできるが、「ピアノの先生」の内面は見えない。一人称で書かれているために、「ピアノの先生」の内面については読者に委ねられていることになり、そのことが小説を読む楽しみにつながる。このように「誰が話を語っているのか」＝語り手は誰か、に着目して読むことで、小説の組み立てや仕掛けがより深く理解できる。

15

10

5

学びを広げる

小説の書き換え

小説「レッスン」(214ページ)は「あたし」を語り手とする物語である。この物語を「先生」を語り手とする八〇〇字程度の物語に書き換えよう。

進め方

① できごとの一覧表を作成する

● 小説の中のできごとを時の経過にそつて整理し、表にする。
● できあがつた表を「先生」視点の表に書き換える。

● 物語を語る上で、小説「レッスン」では明確になつていないできごとを補う場合は、それも表に書き加える。

② プロット(話の筋)を作成する

● 登場人物の特徴を明確にし、呼称(作品中における人物の呼び方)を決める。

● 「その日」(215頁)のできごとを「先生」の視点で捉え直し、場所・行動・人物の様子・会話・心の動きなどの細部を明確にする。

● 効果的な語りになるよう、語る順序を工夫する。

10

5

学習した方略を生かして追加で読むことができる別作品を、二次元コードから閲覧できます。

他の作品も読んでみよう 「なめとこ山の熊」(宮沢賢治)

三人称の語り手



作者

語り手(「作者」)



下人 老婆



読者

※語り手は特定の人物に寄り添って語ることもある。そのため視点が移動することもある。

例 羅生門

一人称の語り手



作者

語り手(あたし)



ピアノの先生 あたし



読者

※人物は語り手から見た呼び名で呼ばれ、「あたし」の視点から語られる。

例 レッスン

1

小説 1

学びを広げる 小説の書き換え

③ 物語を書く

● プロットに従つて下書きする。その際、読者に与える印象を考え、語り手の言葉遣いを工夫する。

● 下書きを推敲し、清書する。

④ 発表する

● 回し読みや自作朗読会などで発表し、感想を交換する。

5

活動の手順を丁寧に示すとともに、生徒作品例やメモ例を掲載しています。学習の見通しやゴールイメージをもちながら取り組むことができます。

219

218

資料編

資料編には、教材の読解に役立つ図版や地図、古典の重要語句や文法を調べることができるページなど、学習のさまざまな場面で活用できる資料を豊富に掲載しています。

文学史年表
古典文法要覧
重要古語一覧
官制・官職／位階
陰暦
古時刻／古方位／十干と十二支
住居・調度
装束
漢文の基本形式
訓読で注意する語
漢文参考略年表
旧国名・都道府県名対照図
平安京条坊図／内裏／大内裏
京都付近地図／奈良付近地図
中国参考地図
常用漢字表



古文教材の脚段に示した語句を一覧にまとめた「重要古語一覧」を、巻末に掲載しています。

重要古語一覧

● 古文編の本文中で*印を付した重要語句を、五十音順に掲げた。
 ● 以下の数字は教科書の本文ページ、太字は*印を付したページを示す。
 ● 品詞名、活用の種類、敬語の種類は略称で示した。

- あ**
 あかし【明かし】「形ク」①光が明るい。②心が清い。▼113
 あかつき【暁】「名」夜明け前の、まだ暗い時分。未明。▼76
 あく【飽く】「動カ四」①満足する。②十分すぎたやになる。飽き飽きする。③(動詞の連用形に付いて十分…する。▼109 113
 あさまし【形シク】①事のよしあしにかかわらず(驚きあきれる)さまだ。意外だ。②あきれて興ざめた。③情けない。嘆かわしい。④ひどい。見苦しい。▼24
 あさましがる【動ラ四】驚きあきれる。びつくりする。▼18
 あし【悪し】「形シク」①悪い。②不快だ。③荒々しい。④醜い。⑤卑しい。⑥下手段。▼25 51・61 111
 あそぶ【遊ぶ】「動バ四」①狩猟・行楽・酒宴などをする。②詩歌・管絃(音楽・舞など)を楽しむ。③あちこち気ままに歩き回る。④遊戯をする。▼52
 いふかひなし【言ふ甲斐無し】「連語」①言ってもしかなかった。②取るに足りない。③情けない。▼60 98 113
 いやし【卑し・賤し】「形シク」①身分が低い。②下品だ。③みすばらしい。④取るに足りない。⑤心が汚い。▼52
 いらふ【答ふ・応ふ】「動ハ下」①答える。返事をする。▼14
 うけたまはる【承る】「動ラ四」①「受く」の謙(承)を受ける。②「承諾する」の謙(承諾)承諾しあげる。③「聞く」の謙(聞く)聞きする。④「見る」の謙(見る)見する。▼37 92
 うし【憂し】「形ク」①つらい。憂鬱だ。②気が進まない。③憎い。④薄情だ。▼76
 うす【失す】「動サ下」①なくなる。②いなくなる。③死ぬ。亡くなる。▼38 100
 うたてし【形ク】①いやだ。嘆かわしい。②気の毒だ。心が痛む。▼26
 うつくし【美し】「形シク」①いとしい。恋しい。②かわいらしい。③立派だ。▼50
 うるはし【麗し】「形シク」①壮麗だ。立派で美しい。②容姿が整っていて美しい。③きちんとしている。端正である。▼111
 え【副】(下に打消の語を伴い)…できない。
- あ**
 あてなり【貴なり】「形動」①身分が高い。高貴である。②上品である。▼52 58・60 109
 あはれなり【形動】①しみじみと心を動かされる。②しみじみとした風情がある。③かわい。④かわいそうだ。▼32 34・42
 あまた【数多】「副」数多く。たくさん。▼18 36・75 98
 あやし【奇し・怪し】「形シク」①霊妙だ。不思議だ。②奇異だ。異様だ。③不審だ。心配だ。④けしからん。不都合だ。▼36 109
 あやしむ【怪しむ】「動マ四」不思議に思う。変だと思ふ。▼37
 ありがたし【有り難し】「形ク」①めったにない。珍しい。②実現が困難である。③(めったにないほど)尊く優れている。▼33
 ありく【歩く】「動カ四」①あちこちに移動する。②歩行する。③補助①あちこちで…して回る。②…し続ける。▼36
 いかで【如何で】「副」①疑問(どうして)。どうする。▼52 58・60 109
 おどろく【驚く】「動カ四」①びっくりする。②はっと気づく。③はっと目覚める。▼14 75
 おのづから【自ら】「副」①自然に。ひとりで。②偶然。③ひよとすると。▼41
 おはす【御座す】「動サ変」①「あり」居りの(尊)いらつしやる。②「行く」来(の尊)いらつしやる。③補助(の尊)…いらつしやる。▼24 50
 おほかた【大方】「副」①一般に。全体として。②だいたい。総じて。③(下に打消の語を伴い)全く…(ない)。▼24 40
 おぼしめす【思召す】「動サ四」①思ふ(の尊)お思いになる。お考えになる。▼97
 おどろく【驚く】「動カ四」①びっくりする。②はっと気づく。③はっと目覚める。▼14 75
 おのづから【自ら】「副」①自然に。ひとりで。②偶然。③ひよとすると。▼41
 おはす【御座す】「動サ変」①「あり」居りの(尊)いらつしやる。②「行く」来(の尊)いらつしやる。③補助(の尊)…いらつしやる。▼24 50
 おほかた【大方】「副」①一般に。全体として。②だいたい。総じて。③(下に打消の語を伴い)全く…(ない)。▼24 40
 おぼしめす【思召す】「動サ四」①思ふ(の尊)お思いになる。お考えになる。▼97
- か**
 かく【斯く】「副」このように。こう。こんなふう。▼19 24・41 42 60 113
 かしこし【畏し・恐し・賢し】「形ク」①恐ろしい。②畏れ多い。③優れている。④尊重すべきである。⑤好都合である。⑥(連用形を副詞的に用いて)甚だしく。▼52
 かたち【形・容貌】「名」①物の形状。外形。②容貌。器量。③美人。美しい顔立ち。④容姿。⑤(物事の様子。▼33 51
 かたがた【互に】「副」互いに。▼33
 かたがた【語らふ】「動ハ四」①親しく語り合う。②親しく交際する。③男女が交際する。④説得する。⑤相談する。▼33
- か**
 おほす【仰す】「動サ下」①命令する。②「仰せらる」(仰せたまふ)の形で。「言ふ」の(尊)おつしやる。お命じになる。▼40
 おぼけ【覚ゆ】「動ヤ下」①自然に思われる。②思い出される。③似る。④(他人から…)と思われる。▼42 97 119
 おもしろし【面白し】「形ク」①景色などが(すばらしい。趣がある。風情がある。②音楽などが(楽しい。興味深い。③風変わりである。▼56 75
- か**
 いか【如何に】「副」①どんなふう。②なぜ。③どんなにか(…だろう)。④なんとまあ。たいそう。⑤どんなに。いくら。▼24 37 39 97
 いささかなり【聊かなり・些かなり】「形動」僅かである。ほんの少しである。▼108
 いさめ【諫め】「名」忠告。諫言。▼92
 いたし【甚し】「形ク」①程度が甚だしい。激しい。②すばらしい。立派だ。▼54
 いたづらなり【徒らなり】「形動」①役に立たない。無駄である。②かきがない。むなし。③場所が空いている。④暇である。▼37 40 74
 いと【副】①非常に。たいそう。②全く。本当に。③(下に打消の語を伴い)たいてい(…ない)。それほど(…ない)。▼32 37 50 54 75 109
 いぬ【往ぬ・去ぬ】「動ナ変」①去る。行ってしまう。②時が過ぎ去る。③人が死ぬ。世を去る。▼18 37 61

単語だけでなく語釈も示し、頻出する重要古語の意味をすぐに確認することができます。